岩崎　純一　著

『岩崎純一全集』　第五十一巻「科学技術、産業（一の一）」

形式科学および自然科学（数学、物理学、化学、宇宙科学、地球科学、生物学）

編纂、監修　　岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

『岩崎純一全集』第五十一巻「科学技術、産業（一の一）」

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第五十一巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、形式科学および自然科学（数学、物理学、化学、宇宙科学、地球科学、生物学）に関する述作を収める。

目次

巻頭言
第一編　〇歳～十九歳
第二編　二十歳～二十九歳
第一部　ゲーデルの不完全性定理およびその証明への私の共感覚による理解方法の解説
第二部　共感覚についてのご質問
（東京大学大学院　総合文化研究科広域システム科学系広域システム専攻）
第三部　今回の地震についての疑問をいくつか
第四部　地震前兆体感のやり取り
第五部　警察犬による一卵性双生児の嗅ぎ分け
第六部　専修大学人間科学部心理学研究室での共感覚検証実験の回答及びインタビュー
第七部　【地震に警戒】何人かの共感覚者・自閉症児の行動に変化【M6～M8 級】
第八部　昨夜分の地震予測結果
第九部　(1)今後の地震予測の記事の書き方 (2)私の地震予測の流れの解説
第十部　地震予測法のアイデアメモ（重度自閉症児・強度共感覚者の能力と地磁気観測計データの併用）
第十一部　私の個人的な発想メモ「電磁気哲学や量子自閉症学の提案」「心と体の話」など
第三編　三十歳～三十九歳
第一部　「音域表と聴覚・共感覚」（様々な日常音・動物の声の音域や、私の聴覚・共感覚による可聴域）
第二部　岩崎式日本語（ISReJP）論理値表
第三部　「音域表と聴覚・共感覚」、超音波知覚者コミュニティ
第四部　岩崎式言語アルゴリズム構想（2013/10/20）
第五部　御嶽山の噴火、登山、日本の山などについての雑感
第六部　東京大学総合的認知研究グループでの共感覚実験の回答及びインタビュー
第七部　数学者（宇宙際幾何学者）・望月新一氏をめぐる動向　― 数学と日本 ―
第四編　四十歳～四十九歳

第五編　五十歳～五十九歳
第六編　六十歳～六十九歳
第七編　七十歳以降
第八編　著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの
第九編　著作権者が岩崎純一であるもの

第二編　二十歳～二十九歳

第一部　ゲーデルの不完全性定理およびその証明への私の共感覚による理解方法の解説

2008 年 5 月 4 日　起筆
2012 年 5 月 5 日　擱筆
2015 年 1 月 19 日　公開
2016 年 12 月 13 日　最終更新

ゲーデルの不完全性定理およびその証明への私の共感覚による理解方法の解説

岩崎純一

2012 年 5 月 5 日

掲載サイト

http://iwasakijunichi.net/

目次

1. 数学・数理論理学についての私の共感覚
2. 不完全性定理とは
3. ゲーデル自身による不完全性定理の証明
4. 私の共感覚による理解方法

1. 数学・数理論理学についての私の共感覚

私は、数学・数理論理学についても共感覚を持っており、このことについて以前よりサイト・ブログ内で言及している。

ここでは、ゲーデルの不完全性定理を例に挙げ、定理の証明の概説に色付けすることで、私の「共感覚的認知による数学的思考過程」の紹介としたい。

ただし、不完全性定理のような、より高度な数理論理学・超数学の分野においては、私の共感覚による認知過程・思考過程を第三者に対してこのような形で再現可能な定理・公理というものは、今現在はそれほど多くはない。

およそ 25 歳以降は、これらの分野においては、文字通り一般の数学者が数学を認識する方法に近い方法をとるようになったという自覚があり、現在、数学関連の共感覚として最も明確に言語表現により（実感とあまり齟齬なく）再現できるのは、ほとんどが初等教育的な「数字の色」や「四則演算」であると言える。

例えば、私は「3＋5」を「3＋5＝青色＋緑色＝黄緑色＝8」などと計算している。もっとも、この「色」の足し算は、可視光線や絵の具の色の配合などとは無関係の、共感覚によるものである。

私と同じく共感覚者でもあり、さらに私が持たないサヴァン的な数学・語学能力を持つことで知られるダニエル・タメット氏は、「二桁の数どうしの掛け算をしようとすると、その間に答えを表す一定の色と形が現れる。ゆえに答えは～である」という共感覚計算能力を持っていると告白しているが、「現在の」ダニエル・タメット氏のほうが、おそらく「幼少期・児童期～20 歳代前半の」私よりも圧倒的に「サヴァン的」な数字・記号認識、世界認識をおこなっていると考えられる。

『岩崎純一全集』第五十一巻「科学技術、産業（一の一）」

これらのことについては、サイト内の「直観像記憶と共感覚」や「喪失した共感覚」のページにおいても詳しく記述した。私の場合、ページ内で紹介した、かつてのサイコロの展開図についての共感覚による解法が、サヴァン的な能力であったと言えるのだろう。

2. 不完全性定理とは

不完全性定理とは、数理論理学における第二階述語論理の公理系の不完全性を示した定理で、クルト・ゲーデルが 1930 年に証明したものである。

不完全性定理

一定程度の有限的算術を含む無矛盾（ω 無矛盾）な形式体系には、必ず決定不能命題が存在し（第一不完全性定理）、この形式体系自身の無矛盾性はこの形式体系において証明できない（第二不完全性定理）。

3. ゲーデル自身による不完全性定理の証明

ゲーデル自身による不完全性定理の証明は、ここでは割愛する。原論文や英語版論文、日本語による翻訳書などを参照されたい。

4. 私の共感覚による理解方法

不完全性定理の共感覚による理解方法は、私自身の中に次の三通りが存在している（今後存在しうる）と考えている。

(1) 文字列や論理式の全てを一意の自然数として表したゲーデル数 P をそのゲーデル数 P に対応する一意の共感覚色に置き換え、決定不能命題 G に対応する共感覚色によってパラドックスを導出し、定理を証明する。すなわち、ゲーデルの証明法をそのまま共感覚色に置き換えるため、数理論理学における不完全性定理の証明への理解そのものである。

(2) ゲーデルによる証明の経緯を共感覚色に表現する。ゲーデル数に共感覚色を付すのではなく、「ゲーデル文 G は証明不可能である」という文を「青色の文」などと表現する。すなわち、数理論理学的命題の大きな単位を独自の共感覚によって理解するため、文字列や論理式を構成する文字・記号には共感覚色を一意的に対応させない。

(3) 不完全性定理の言明を数理論理学的証明なしに一足飛びに真であると確信する。すなわち、「ある形式体系における決定不能命題の存在と、その形式体系の無矛盾性のその形式体系自身による証明不可能性」を数理論理学的思考を経ずに理解する脳を持つに至る。

ここで、(3)はおそらく、先に紹介したダニエル・タメット氏のような、世界的に見ても極めて限られた者のみが成人以降も持ち続ける、一種の「超文学的確信」のようなものであろうと思う。

このような能力を持っている場合、例えば不完全性定理は以下のように「自明のこととして」認識されると考えられる。

「不完全性定理が誤っていると仮定すると、脳裏に現れるはずの共感覚色の緑色が現れな

い。よって、不完全性定理は正しい。」

先に紹介したサイコロの展開図についての私の共感覚による解法や、そこから得られる「超文学的確信」確信も、この(3)に近いと言えるだろう。

数学的な思考や文献への理解の経緯を経ずにこういった「証明の回答」に脳が至るような事態は、現在の私においては、初歩的な数学は別にして、高度な数理論理学や超数学と向き合っている際には、あまりない。すなわち、高度な数学になればなるほど、私の思考は一般の非共感覚者である数学者に近く、いわば「共感覚を用いた数学的思考」になり、「サヴァン的な共感覚的思考」とは言えない。

一方で、(1)および(2)が、私が同定理の理解の当初から成人の現在まで用いている共感覚的思考なのであるが、ここでまさに不完全性定理そのものに従うならば、文字列や論理式の全てを一意の自然数であるゲーデル数 P として表現する以上、(2)および(3)そのものが(1)のゲーデル文 G として表現可能である。

従って、ここでは(2)を織り交ぜつつ、主に(1)としての第一不完全性定理の理解における共感覚の用い方について、紹介するものとする。

記述（文章）の色は、その記述が言明する内容について私が知覚している共感覚色である。

【証明の概説始め】

文字列や論理式の全てを一意のゲーデル数 P で表現し、この P に対応する一意の色彩を考える。（この「文字列や論理式の全てを一意のゲーデル数 P で表現し、この P に対応する一意の色を考える。」という文に私自身が知覚する共感覚色である「赤紫色」それ自体も、他の全ての文に一意的に対応する色のいずれとも異なる色彩を持つものとする。）

自然数の変数 x を持つ論理式を考え、この論理式自体も一意の色を表現するものとして SYN-COLOR(SYN-C)n(x)とし、この論理式を枚挙する。

SYN-C1(x), SYN-C2(x), SYN-C3(x), ……SYN-Cn(x)

「SYN-Cx(x)は証明不可能（¬PROV）である」という文に対応する論理式を K(x)とする。K(x)は上記 SYN-Cn(x)のうちに存在する。

K(x)=SYN-Ck(x)

ゲーデルの証明における 45 個の再帰的関数および証明可能性を表す 46 個目の非再帰的関数 PROV を定義する。これらの関数もまた、終始一意の共感覚色をもって決定不能命題の導出に関わる。

K(x)の x に k を代入し、ゲーデル文 G に対応する共感覚文 SYN を考え、SYN 文 K(k)を定義すると、次が成り立つ。

『K(x)=SYN-Ck(x)は、「SYN-Ck(k)は¬PROV である」を意味する。』

すなわち、

『SYN 文 K(k)は、「SYN 文 K(k)は¬PROV である」を意味する。』

真である SYN 文のみを証明する形式体系を考えると、次が成り立つ。

「SYN 文が PROV ならば､SYN 文は真であるから､SYN 文は¬PROV となり､矛盾する。」

「¬SYN 文が PROV ならば、¬SYN 文が真であるから、SYN 文が PROV となり、矛盾する。」

すなわち、形式体系が無矛盾であるならば、SYN 文と¬SYN 文はいずれも証明不可能である。

よって一定程度の有限的算術を含む無矛盾（ω 無矛盾）な形式体系には、必ず決定不能命題が存在し、第一不完全性定理が証明された。

【証明の概説終わり】

第二部　共感覚についてのご質問

（東京大学大学院　総合文化研究科広域システム科学系広域システム専攻）

2010 年 10 月 8 日　起筆、擱筆

一般利用者には非公開。閲覧希望者は個別に岩崎まで問い合わせよ。
関係女性は、各女性施設の閲覧室にて閲覧可能（閉架式）。当該閲覧室を訪れよ。

第三部　今回の地震についての疑問をいくつか

2011 年 4 月 14 日　起筆、擱筆、公開

ここ最近、テレビ・ラジオなどを見聞きしていると、被災者の口から「ウチの家（町）はこんなに被害を受けているのに、あの家（町）はもう直りかけている」などといった嫌味なニュアンスの発言がポロポロと聞かれるようになってきた。人間はそういう生き物なのだと改めて思う。
さて、いくつか気になる点を。◆マークが現状、★マークが僕の意見。

■津波警報

◆津波警報には、「津波の津波警報」と「大津波の津波警報」の二種類がある。いずれも「津波警報」の一種であり、「大津波警報」という用語と概念はない。ただし、多くのマスメディアは、国民に報道する際には、「津波の津波警報」を「津波警報」、「大津波の津波警報」を「大津波警報」と呼んでおり、事実上は「津波警報」は前者のみに限定されているが、気象庁より「津波警報」が発令された際には、それが「津波」か「大津波」かに注意しなければならない。

★いやはや、用語のややこしさに気を取られているうちに津波にさらわれて亡くなった人もいるかもしれないと思えてくるような問題である。「大津波警報」という用語があっても良さそうな気がするが、なぜ駄目なのだろうか。早く是正した方が良さそうだ。

■地震と震災

◆「東北地方太平洋沖地震」・・・日本の太平洋三陸沖を震源として発生し、東日本大震災をもたらした地震。
　「東日本大震災」・・・日本の太平洋三陸沖を震源として発生した東北地方太平洋沖地震によってもたらされた災害。
　同様に、「関東大震災」をもたらしたのは「大正関東地震」。

★実際には、ほとんどの国民は区別していないどころか、政府要人たちも混用している。地震と震災とを明確に分ける意識が人類に生じたのは、近代以降の地震観測技術の向上によって遠方の地震まで観測できるようになったからだろう。
　つまり、理論上は、「東北地方太平洋沖地震」が起こっても、「東日本大震災」が起こらない可能性を追求することができるのが、現代の我々である。ただし、人間の力で止められる可能性があるのは、半永久的に後者であり、前者ではないだろう。

■原子力安全・保安院

◆「安全」と「保安」の間に「・(テン)」が入るのが正式である。テレビを見ていると、発音の際には、アナウンサーによって「アンゼン・ホアン」と区切ったり「アンゼンホアン」と続けたり、バラバラである。

★僕は「・(テン)」が気になってしょうがないのである。僕だけではなくて、多くの人が気になっているようである。塵も積もれば山となる。この「テン」でいちいち区切る息つぎを十回ほど繰り返すと、五秒くらいになる。五秒もあれば、津波や放射線から逃げられるぞ。
　というわけで、もう少し良いネーミングはないものか。
　原子力以外のエネルギーの保安も管轄していると言っても、これだと「安全を保安する」という日本語に聞こえ、「頭痛が痛い」と同じで、「原子力頭痛・痛い院」のように聞こえるから、気になるのだと思う。
　このネーミングの理由が、「原子力以外のエネルギー保安も管轄しているから」ではなく、「単に日本語の上手なつなぎ方を考えるのがちょっと面倒だったから」だということは、この機関の英名が「Nuclear and Industrial Safety Agency」であることからも窺われる。
　そこで、僕が考えた名称候補。

「原子力産業保安院」「原子力産業保全院」「原子力安全院」「原子力安全保護院」「原子力安全監視院」「原子力安全警衛院」「原子力機関保全院」「産業保安院」「原子力保全庁」「原

子力エネルギー保全庁」

第四部　地震前兆体感のやり取り

2011 年 6 月 4 日　起筆、擱筆、公開

6 月 2 日の新潟での地震を予測・予知できた共感覚者がかなり多く、皆さんそれぞれのブログで前もって報告しており、私も何か共感覚で色が見えたら、報告します。

私の体調も、3 月 11 日の地震のときよりかなり悪く、他の共感覚者の体調悪化もなぜか激しいようです。

言葉にすると、二つの磁石を片手ずつに持って、N 極と S 極（N 極）とを近づけ、くっつかないように（離れないように）無理やり我慢しているときのグニャグニャした感覚が、震源と自分との間で感じられます。

6 月 5 日　この記事の下の方に、私の書き込みを追加中。
6 月 4 日　現在　福島県中通りの地下の方向が相変わらず青色。耳鳴りが激しい。
6月2日　福島県中通りの地下の方向が青色（6月4日未明の福島県浜通りの地震の前兆？）
6 月 1 日　福島県会津地方の上空の方向（かなり不明瞭）が紫色（6 月 2 日の新潟県の地震の前兆？）

■共感覚自然感知研究会（共感覚で地震の前兆が体感できる主婦の女性などが集う。）
http://mixi.jp/view_community.pl?id=5561568

※　私の書き込みだけ抜粋。

2011 年 06 月 01 日 21:35 純一
○○さん、こんばんは。

○○さんや私など、体調が磁場によって変化する共感覚者は、うかつに fMRI（核磁気共鳴を利用）に入れない可能性がありますね。

fMRI で共感覚の研究調査を実施されて、あとで○○さんのように頭痛モヤモヤで倒れた知人がいます。「fMRI は安全」という話がまかり通ってますけれど、怪しいですね…。

2011 年 06 月 03 日 18:08 純一

昨日は、福島県中通りの方角（地面を突き抜けた底です）が青かったから、北の方かなとは思いましたが、やはり場所まで特定できるわけではないですね。

2011 年 06 月 03 日 23:36 純一
共感覚の色で見えたとしても、精度が上がるわけではないので、今のところあまり使えないなあ、と思っています。

それにしても、〇〇さんは地震の時間帯がほとんどドンピシャですので、場所について私がドンピシャになれたら、かなりすごいことですが、私は昔に比べたら感覚が弱まってきましたからね…。

2011 年 06 月 04 日 01:06 純一
当ててしまいました…。今、福島県沖で地震。

平成 23 年 06 月 04 日 01 時 04 分 気象庁発表
04 日 01 時 00 分頃地震がありました。
震源地は福島県沖 （ 北緯 37.0 度、東経 141.2 度）で震源の
深さは約 20km、地震の規模（マグニチュード）は 5.6 と推定されます。

2011 年 06 月 04 日 01:09 純一
分かりました。たぶん、昨日の福島県の方角の青い色が今の地震の前兆で、その前のおかしな紫色（方角は不明だった）が昨日の地震の前兆と見ました。

2011 年 06 月 04 日 20:32 純一
今さら思うことですが、私は日中は仕事で家にいないことが多いので、朝に色が見えたとしても、わざわざネット上に書き込んで報告できないのが難点ですね。

相変わらず福島の方角が青色ですが…。

あのですね！
そもそも、放射線というのは主に電磁波全部のことでして、電磁波とは電場と磁場による波動ですから、つまりは、「放射線の影響」とおっしゃっているのは主に「磁場の影響」のことなのです。

しかし、具体的に福島第一原発の件を指しているのなら、「いつもより影響が強い」とは言えるかもしれませんね。

2011 年 06 月 05 日 18:05 純一
私も間違えることがあるので、頼りすぎないほうが得策かもしれませんよ！？
というのは冗談で、何か気付けば書きます。

第五部　警察犬による一卵性双生児の嗅ぎ分け

2011 年 6 月 26 日　起筆、擱筆、公開

チェコの動物行動学者らが科学誌プロスワンに発表したところによると、優れた警察犬は、遺伝情報が同一である一卵性双生児であっても、細菌や寄生虫感染などの要因で生じた両者のにおいの違いを嗅ぎ分けられると言える有意の実験結果が得られたとのこと。
私としては、共感覚の観点から関心を持っている。

●警察犬、双子もかぎ分け…細菌・寄生虫で区別？
http://www.yomiuri.co.jp/science/news/20110625-OYT1T00424.htm?from=navr（リンク切れ）

●Dogs Discriminate Identical Twins
http://www.plosone.org/article/info:doi%2F10.1371%2Fjournal.pone.0020704

第六部　専修大学人間科学部心理学研究室での共感覚検証実験の回答及びインタビュー

2011 年 12 月 2 日　実験実施
2012 年 6 月 7 日　回答結果を実験実施者より受領。一部の関係する研究者等にのみ直接送付により提供。
結果ファイルは実験実施者、回答内容は岩崎が権利を保持
著作者が大学及び実験実施者に権利の一部を譲渡した扱いが成されているものと推定される
著作者及び著作権者への問い合わせが必要

第七部　【地震に警戒】何人かの共感覚者・自閉症児の行動に変化【M6～M8 級】

2012 年 1 月 27 日　起筆、擱筆、公開

東北・関東方向（日本の東方向）に赤紫や紅色を感じた共感覚者、知人の自閉症の男の子の行動がおかしいというお母様からのメールがあるなどしたので、一応、書いてみた。
私の共感覚その他の感覚にはそれほど変化はないが、近所のスーパーマーケットの自動ドアやネズミ駆除器のキーンという音がいつもよりも苦しい、という変化は出てはいる。もしかしたら、東京なのだろうか。

本記事の予測よりも「前に」発生した付近の地震一覧
01/27　13：19　千葉県東方沖　M5.1　震度 3　深さ 10km
01/26　05：42　宮城県沖　　M5.1　震度 4　深さ 50km
01/23　20：45　福島県沖　M5.1　震度 5 弱　深さ 50km

第八部　昨夜分の地震予測結果

2012 年 1 月 29 日　起筆、擱筆、公開
（2018 年 7 月 29 日に追記：現在、旧サイトのリンク先は『全集』に収録。）

■一昨日の地震予測記事に対応する地震は、昨日の朝から続いている群発地震のようである。
私自身も、地震の事前感知の要素を帯びた共感覚（空や文字に見える色がいつもと違う、など）を持ってはいるし、私以上にその予測能力のある自閉症者・解離性障害者などとサイトや勉強会で交流している。
普段から色々な方からの地震感知報告をメモしてはいるが、今後も今回のようにブログに書く機会があると思うので、ブログにおける地震予測記事の執筆方針を、後で自分でまとめてみたい。

順に、情報発表日時 発生日時 震央地名 マグニチュード 最大震度
平成２４年０１月２９日１６時５１分 ２９日１６時４６分頃 山梨県東部・富士五湖　Ｍ４．７ 震度４
平成２４年０１月２８日０８時０７分 ２８日０８時０４分頃 山梨県東部・富士五湖　Ｍ４．１ 震度３
平成２４年０１月２８日０７時５１分 ２８日０７時４６分頃 山梨県東部・富士五湖　Ｍ４．１ 震度３

平成２４年０１月２８日０７時４８分 ２８日０７時４３分頃 山梨県東部・富士五湖　Ｍ５．５ 震度５弱
平成２４年０１月２８日０７時４４分 ２８日０７時３９分頃 山梨県東部・富士五湖　Ｍ５．０ 震度４

■昨夜の地震予測
https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/53332430.html

■産経新聞より

「イヌ、ネコは震度５以上で予兆行動…地震予知最前線　動物の感知能力を探る」

大地震発生の前後に動物や魚などがとる異常行動を分析し、地震予知につなげようという研究が、専門の研究者らによって進められている。地震学者の間では、動物の行動を地震の予兆現象につなげるのは非科学的だとする意見がある一方で、謎が多い動物の感知能力の解明に期待を寄せる声も大きい。これまでにイヌやネコは震度５以上の地震に事前反応するとのデータも得られており、東日本大震災後は「未科学」といわれるこの分野への関心が高まっている。

●上記新聞記事への感想

震度３か４でもイヌやネコは事前に反応していると私は感じるし、地震感知の共感覚を持つ人もそのくらいの地震の直前に反応する場合がある。ただし、震度５以上かどうかに関係なく、そもそも動物の地震感知を、否定するか、疑似科学とする地震学者が多い現状ではある。いわんや人間をや、といったところだと思う。重度の自閉症児には、イヌやネコとほとんど同時に感知する子もいる。そのことについて、我々が素直な心で感動するという姿勢が必要だと思う。

第九部　(1)今後の地震予測の記事の書き方 (2)私の地震予測の流れの解説

2012 年 1 月 29 日　起筆、擱筆、公開

■前回と前々回は、突如として地震予測の記事を書いてしまいましたが、今後も、日本国内の震度５弱以上の中・大規模地震を知人の自閉症者・解離性障害者や私などが事前に察知した場合、（書く時間があれば）このブログに書くこともあるかと思います。（そして、

該当の地震と思われる地震が起きたあとは、今後の研究のためにも、自分でメモを溜めるなり、どこかサイト内に別のページでも作るなりして、予測の精度を検証していこうかと思います。）

ただし、書きっぱなしも良くないので、

(1)今後地震予測のブログ記事を書く上での私なりの注意点や私の考え
(2)そもそも中・大規模の地震の前日や前々日に私にそれが分かる方法・経緯

について、一通り書いておきます。

ちょうど今日も、「昨年の大地震の恐怖の余韻の残る中、地震の予測情報を岩崎さんのブログに載せることの是非」というような話が集まりの中で出ましたし、自閉症児のお母さん方などともこのことを議論しましたので、その皆さんがご覧のこのブログでも、それについて少し書いてみます。

元より私のライフワークは、「共感覚学者・地震予知学者などになること」ではなくて、「私の目から見て確かに自然観察力を持っていると信じさせてくれる自閉症者・共感覚者・精神疾患者・動物たちなどのことを、私なりの視点や責任で世に問うこと」だと思っています。

地震の予測の話題も、その一環としてごく自然の成り行きで関心を持っているものです。そして、私が、「災害が起きてから人（被災者）の命を救済すること」以上に、「普段から動植物全体・地球全体の生命の躍動を見守る人間であること」のほうがよほど大切で心温かい姿勢だ、後者が日頃からできていない人に前者が務まるはずがない、という考えを持っている人間であることには、今も変わりはないと言えます。

■(1)

何よりもまず、哲学的な話ですが、「地震を含めた広義の自然現象の予知・予測」という概念は「これらを体感として予知・予測している人」には存在しない、という認識論・存在論上の命題を、自分の身体だけを用いた「地震予知・予測」経験のない多くの人々が理解しておく必要があるのではないか、と私は思っています。

もちろん、「地震」という語を「地面の震動」と厳密に読めば、万人にとって「震え始める」時点は同じですから、「まだ地震は起きていない」ことになりますが、ある意味で、「体で予知している人」にとっては「すでに地震は起きている」、すなわち「予知」ではないわけです。

「予め（あらかじめ）知る」や「予め測る」という言葉の裏には、常に「まだ私（自己）の意識と身体にとって未生起・未到達・未存在の現象や事物」との含みがあるのであって、

「予知」とは常に「予知する身体を持たない人の側の認識論」であり、「予知する身体を持つ人には思い付かない認識論」と言えます。

この後者の最たる姿が自閉症児や動物である、というのが、もうずっと以前から変わらない私の意見であるわけです。自閉症児や動物に対する私の敬意や感謝が、そのような彼らの自然観察力のすごみから来ているということをこうしてブログで言うのに、何の恥ずかしさもないくらいです。

その意味で、前々回の私の記事に書いた、私の知人の自閉症男児による地震察知や、私自身の高周波察知感覚や共感覚による地震察知などは、「予知」を書いているというよりは「現在の地震現象の報告」を書いているにすぎないとも言えます。

逆に考えると、昨今の気象庁の「緊急地震速報」が、「地震“予知”情報」や「“近未来”地震警報」という名称でない理由は、多くの地震学者の知性において「すでに地震が起きている」ことの確証がとれたためであると言えると思います。

そうでない認識論の構造を持つ文明や社会においては、「緊急地震速報」の内容そのものは擬似科学であり得ることになります。これを疑似科学とする信念は、「今の緊急地震速報には誤報がかなり多く、テレビや携帯電話で速報を受けた国民が混乱することがある」といった現実的な「精度」の問題とは無関係に盛衰するものだということを心に留めておく必要があると思います。

そのような文明や社会が精度の高まった未来の「緊急地震速報」を目の前にしてもなおこれを信じなかったとしても、その心は、自閉症児たちや動物たちや地震雲たちの一週間前から数日前までの地震予知を目の前にしてもおそらく今後もしばらくはこれらを信じることができない我々現代日本人の心と、何の違いもないことになります。

自然科学と我々の心とは常にそういう危険をはらんでいて、逆に言えば、将来的に私の前々回の記事のような内容がもっと正確になれば、それはごく普通に「緊急地震速報」という真っ当な名称にもなり得るわけです。

いつか、「緊急地震速報」が二週間も前から出される超高度科学技術時代は来るかもしれません。ただし、それは、我々の流す汗水そのものが感知したものではなく、我々が汗水を流して生み出した地震予知機器類が感知したものであるでしょう。人間は地震予知機器類の予知結果のただの報告者となると思います。極論を言えば、我々人間の目や耳は、ほとんど何の役にも立たないものとなっていくのかもしれません。

それでも、やはり私としては、これまでにも優先的に心打たれてきたし、これからも優先的に心打たれていくのは、我々人間の、そして我々人間もその一員にすぎない動物の汗水が直接に地震を感知する力のほうであると感じています。

さて、心に留めておかなければいけないこととして、「地震予知」をサイトで扱うというだけで、昨年の大地震を経験された被災者の方々などに不安感・恐怖感を与えるおそれがあるということがあると思います。

そうかと言って、現在の日本の「緊急地震速報」のような直前情報や、海外ではかなり

進んでいる地震前の電磁場の動きの研究などに、意味がないかと言うと、これはこれで意味があり、人の命を救うことがあるわけです。「緊急地震速報」を出すときに、気象庁の職員が、「我々の速報が日本国民を驚かせ、どこかの田舎の高齢者の心臓を止めたらどうしよう」などとは考えないわけです。

これは、いつも私が自閉症や共感覚を持つ子どもや動物たちの行動を見ていて、感動するときに思うことなのですが、先ほども書いたように、我々がこれらの情報を「意味がある」と判断できるのは、「情報が真である」ためではなく、「人の命を救いたいと思う心が情報を真にする」ためだと私は考えています。

非常に難しい話で申し訳ないですが、私の哲学の認識論上の思考過程を、自閉症児・発達障害児のお母さん方の読者も多いこのブログで分かりやすく書く方法が、私には自分の説明力の未熟さゆえに分かっていないだけだと思います。

「情報の内容」いかんに関係なく「情報の受け取り方」は人によって違うということを、我々は昨年痛感しました。情報を一回耳にしただけで冷静で丁寧な対応をとった人もいますし、何十回と耳にしてもそれを聞かずに独断で行動して津波に飲まれた人もいました。

これは、どちらが正しいか間違いかの問題ではなさそうです。自分の愛する船を放っておいて高台に逃げるのと、愛する船をそばで見ながら津波に飲まれるのと、どちらが漁師にとって幸せか、これを他人が判断することは良くないことであると思います。

すでにネット上には個人レベルで地震予知体感情報を発している学生や主婦の方々のサイトが多々ありますが、どの情報を信じるかは、受け手側の責任や好みなのだろうと思います。私や自閉症者・共感覚者の地震予測も、きっとそうだと思います。

そういう意味もあって、読者・被災者を怖がらせることになるか安心させることになるかといったことを情報発信者のほうで気にすることの是非自体に、答えがないと私は思うので、特に気にすることなく、ただ淡々と記事を書こうかと思っています。

そもそも、地震予知というものは、外れたほうがありがたいわけです。外れたら外れたで、当たったときと違って誰一人死なないのだから、予知の当人・予報の当人は、恥じて謝るよりも、喜ぶべきではないでしょうか。謝る必要がないと言うよりは、謝ることができないとも言えそうです。なぜならば、「地震を完璧に言い当てる」ことは、物理学の上でも原理的に不可能なことだからです。

ただし、今現在は、昨日紹介した産経新聞のように、「予知」という言葉には、どうしても疑似科学的な響きが伴うようですので、「予知」よりも「予測」を好む人も多いようです。しかし、これも「言葉の綾」にすぎないと私は思いますので、私の場合は時と場合により使い分けています。

■(2)

◆震度５弱以上の揺れが予測される地震について、その地震の前々日から数時間前までに、（ブログを書く時間があれば）次の内容を書こうと思っています。
●予測されるマグニチュード、震度、震源、実際の体感

◆私の周りで地震予測を自分の体だけを使っておこなっている人には、次のような人がいます。

●私がサイト開設以来出会ってきた人（特に重度自閉症・重度解離性障害・重度統合失調症・言語障害を持つ子ども・男性で、報告は主にお母さんなどご家族から来る）
●私の勉強会のメンバーや知人で、地震予測体感のある人（ほとんどが女性。男性の場合、「地震予測できている可能性のある人」は「言語障害を抱えている人」であることが多く、前記の分類に含めた。）
●私が参加している共感覚自然感知研究会・日本共感覚協会・日本的共感覚人間学研究会などのメンバー
●私自身

私が見てきた限りでは、ここに挙げた人たちは、緊急地震速報などが捉えている疎密波である P 波・S 波よりもっと前の疎密波や電磁波を体で捉えていると考えられる点で共通していますが、重度の自閉症児は震源地域を当てる傾向があり、私のように言語障害のない共感覚者・離人症者・アスペルガー症候群者は地震の規模を当てる傾向があります。
そして、重度の自閉症児が規模までを当てることはあっても、逆に私が震源地域を当てることはほとんどできません。このように、それぞれに得手・不得手があるため、色々な方々の情報を組み合わせているわけです。
地震予測の時系列を描くと、だいたい以下のようになります。

★地震の一週間～数日前

まず、重度自閉症児が、震源と思われる方角を指差して「わーっ」と泣き叫んだり、部屋の中を走ったりして、それを見たお母さんが私にメールを送って下さいます。この段階では、私自身が単独で地震を予知することはめったにありません。
（言語障害があるお子さんばかりで、その時点では地震とは別件である可能性もあるので、「お子さんが地震予測したら、メールを頂けるとありがたいです」ではなくて、「何かお子さんの様子が変化したら、色々な分野で勉強になるので、メールを頂けるとありがたいです」という言い方をしてある。）
中には、「ガラス窓に向かって走って突っ込んで、ガラスが割れた」、「ここ最近、夜驚症が激しい」といったお子さんの状況を報告してくるお母さんがいらっしゃいます。元々、

急に走り出して物に突っ込んだり、夜驚症を発症したりするのは、自閉症児・その他の発達障害児・多動症児によくある特徴ですが、地震の前にはより大きな症状が出るようです。

また、この段階で重度自閉症者以外に電磁場の変化に反応していると思われるのが、昨日の産経新聞にもあったように、動物で、イヌ・ネコのほか、鳥の飛び方や虫の動き方の変化の報告もあります。動物の地震予知行動を真剣に研究していない先進国は日本くらいで、欧米はもちろん、中国でさえ「オカルト科学」扱いしておらず、きちんと研究報告を出しています。

（国民がそれなりの人数でもって「ある」と言っているもののうち、国民と国を救うかもしれない「感性」や「能力」をまじめに研究しない手はないと思います。こういうところが、日本の学術研究の発想が世界に比べて遅れているところだと思います。）

↓　↓

★地震の数日前～

次に、中重度のアスペルガー症候群や解離性障害者の子ども・生徒さん（主に私の勉強会に来て下さった人）や一部の一般女性が、当人たちが「お化けの足音」、「ヤマタノオロチみたいなもの」、「電波っぽいもの」、「超音波らしきもの」などと表現するものを感知し始めます。

（このような文学的表現を、私の知る自閉症児の行動情報と組み合わせると、震源などがより正確になっていくわけです。この段階で私が単独で地震を予知できている場合もありますが、大体はまだ人に頼っている段階です。）

↓　↓

★地震の前々日～前日

軽度の自閉症・解離性障害者や、私をはじめとする一部の共感覚者などが、めまい・吐き気・悪寒などを感じ始めます。

（ここで、共感覚による地震感知とはどういうものかというと、「震源方向から来る電磁場の変化を体感している」という敏感な五感に加えて、「震源方向の時空に付いている色が変化している」などの実感が出ていることを言います。例えば、前々回の記事の「自動ドアやネズミ駆除器の超音波がいつにも増して極めて不快に感じられた」といったことに加えて、「日本の東側の共感覚色が紫色か青紫色を帯びた」といったことを体感するわけです。

さらに、いわゆる「地震雲」という独特の雲がはっきりと出るのもだいたいこの段階で、地震雲を逐一ブログで報告している人も多いです。私は、この地震雲を見つけるのも得意

な人なので、自分の高周波察知や共感覚と合わせて、より精度を増したいと思います。）

↓　↓

★アメリカ・ヨーロッパ・日本など先進国に設置してある、主にアメリカの研究機関・米軍の手による地震予知・気象変化予知機器類が反応する。
（ここからが、現在「実質的には確証されている」自然科学的な地震予知に当たると思われます。多くは書きませんが、世の中には色々と恐ろしい技術があるようです。本当は、二週間ほど前から反応している形跡があります。）

↓　↓

★日本の研究施設の同機器類が反応する。
（ここからが、現在「表向きは確証されている」自然科学的な地震予知に当たると思われます。気象庁は、この時点を「地震発生」と呼んでいます。）

↓　↓

★地震直前
　緊急地震速報発表

↓　↓

★実際の揺れが発生
（気象学などの術語を知らない我々国民が一般に「地震」というと、だいたいはこれを指している。ただし、「緊急地震速報」は「地震発生後」に出されるもので、「最初の主な揺れ」は「主要動」と呼んでいる。）

≪気象庁の参照ページ≫
http://www.jma.go.jp/jp/quake/

　そこで私は、まず重度自閉症児のご家族や、軽度の自閉症・解離性障害者などから来た数通のメールを見て、「ああ、（台風でも大雪でもなく）地震だな」と判断できた場合には、その子・その人たちの行動をメモしておき、その後に本当に私自身にも地震の予兆が共感覚の色や音などで感じられたり、他の知人にも同じようなことが起きたりすると、そこで地震をほぼ確信して、ある程度マグニチュード・震度・震源などを予測して記事にしよう

と思います。
　ただし、「地震が起きます」とは書かずに、先日のように「地震に警戒」という表現を使おうと思います。

第十部　地震予測法のアイデアメモ（重度自閉症児・強度共感覚者の能力と地磁気観測計データの併用）

2012 年 2 月 3 日　起筆、擱筆、公開
（2018 年 7 月 29 日に追記：現在、旧サイトのリンク先は『全集』に収録。）

■この記事は、自閉症（ICD-10 分類コード：F84.0）を抱える日本の子どものうち、中・大規模地震の前に特殊な泣き方・行動を見せる一部の子どもに対する私的な関心から、書いたものです。地震学・気象学・地球電磁気学などにお詳しく、もし当記事に誤りなど見つけられた読者がいらっしゃいましたら、ご教示下さい。

■冒頭

　東日本大震災以降、稀にマグニチュードや震源をおおまかに言い当てることがある私自身の地震予測体感（共感覚や離人症状による電磁波や音波の察知など）を活用できないかと、色々と試しているが、「試す」というのは、つまりは体が異変を察知したらメモする、目をつぶって地面を感じてみる、といったことにすぎない。
　そういうわけで、地震予知学者になるつもりはないが、今回は、私の共感覚とは別に思い付いた、「自閉症児の能力」と「地磁気観測計データ」との合わせ技のような予測法の入り口部分を書いておこうと思う。
　昨年末に思い付いたが、前回の記事でも書かずにおいたものである。しかし、知人の共感覚者や私の共感覚のみによる自力での地震予測以上に、自閉症児に頼るこの予測のほうが精度が高い傾向があるため、書きたくなった。
　先日の 1 月 28 日の朝の山梨県東部・富士五湖を震源とする中規模地震を例にとる。

●【地震に警戒】何人かの共感覚者・自閉症児の行動に変化【M6～M8 級】
https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/53332430.html

●昨夜分の地震予測結果
https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/53342886.html

●(1)今後の地震予測の記事の書き方 (2)私の地震予測の流れの解説
https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/53358616.html

ちなみに、私が今日の記事で強調したいのは、「動物の能力に近いところで生きていると思われる自閉症児たちの自然観察力・察知力の素晴らしさ」のみである。今から書くことは全て、それを言うための回り道であると思っていただければ幸いである。

■地震前の自閉症児の行動

今現在、この私のブログ・サイトを通じて出会った自閉症児の中には、地震の前に非常に強い前兆を覚えるらしい重度自閉症の男児が、少なくとも二・三人いる。私を含めた共感覚者にも、地震の前に体調の変化を覚える人は多く、ほとんどが女性だが、ここでは「重度の自閉症・知的障害を持つ男児たち」に焦点を絞りたい。

どうやら、男性の場合、私のような強い共感覚や地震前兆の体感を持っている人は、ほとんどが「言語障害・知的障害者」だと思われる。この理由は、ブログで何回か取り上げてきたが、また日を改めて書きたい。

さて、前回の記事にも書いたように、この自閉症男児たちは、夜に急に起きて、震源と思われる方向を指差して「わー」と泣いたり、震源の反対と思われる方向に走り出したりなどする。

男児たちの行動をお母さん方と私とでメールで議論しているうちに、「もしかして、この子たちは、自分と震源とを結ぶ直線方向に動きたくなる衝動に駆られるのではないか」ということまでは、何となく分かってきた。自閉症児によって違う点も多いが、私の知る子たちの場合、地震の前には似たような行動をとるようである。

1 月 27 日の記事に、震源の予測として「東北・関東方向（日本の東方向）」とだけ書いたが、これは兵庫にいる一人の男児がそちらを指差したり、避けて走ったりしたのを、私がその子のお母さんから聞いたからである。

しかし、彼には、重度発達障害に特有の言語障害がある。兵庫から東方向全体を「わー」と言って指差すだけなので、震源が大阪なのか名古屋なのか東京なのか仙台なのか、海の果てなのか、分からない。

■自閉症児の地震前兆行動の程度と震源までの距離との関係

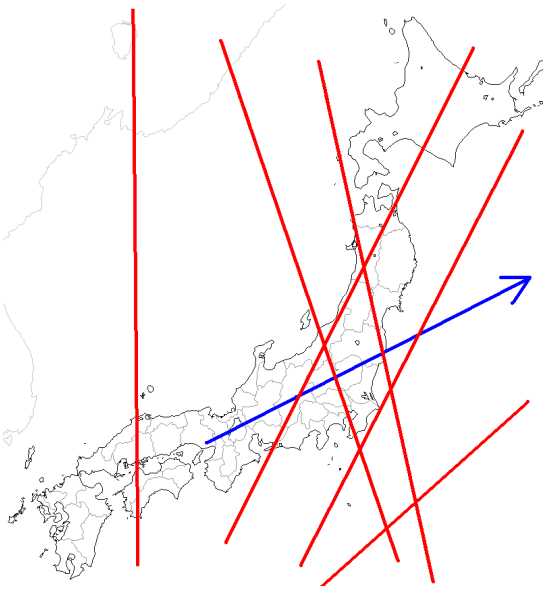


図 1

図 1 の東方向の青い矢印は、兵庫の男児の居場所を起点として、男児が指差した方向を表している。その子の母親と私とが、震源の方向を表していると考えた方向である。

男児が感知しているものが電磁波なのか、音波なのか、太陽風なのか、宇宙線なのか、いったい何なのかは分からないが、ともかく男児が無邪気な泣き声と共に「震源があると判断した方向」を漠然と示しているだろう、ということである。

日本は細長い形をしているから、例えば、この男児が東京にいて西を指差すと、東京以北は震源候補から外せるが、九州や中四国や関西から東を指差すと、太平洋ベルト地帯はもちろん、誤差を考えると北陸や東北が震源である可能性もある。まさに、この青い矢印の通りである。

自閉症児本人たちの体感では、もっと詳細に特定できている可能性はあると思うが、何しろ、彼らには「東京」や「名古屋」といった地名が分からない。

青い矢印の長さを定める方法として、一つには、その子の母親の言い方で言えば、「この子の心の叫びの強度」と震源との位置関係を調べる手がある。男児の泣き方や動きが激しければ、震源は近い（青い矢印が短い）かもしれない。つまり、男児の前兆行動の激しさと震源の近さとは、比例関係や冪乗関係にあるかもしれない。

いわば、3.11 の直前にクジラが大量に東北・関東沿岸に打ち上げられたり、奇妙な雲が出たりしたように、自閉症児の行動は、ほとんど動物たちや雲たちと同じかもしれない。しかし、「心の叫びの激しさ」などというものは、数値では測りようがない。

これは、自閉症者・発達障害者や我々共感覚者の特殊な知覚様態の報告が、長年、学術界から認められなかった最大の理由でもある。数値なくして子どもの心の叫びが分かるのは、どこまでも科学者ではなく肉親の特権なのだろう。

■世界各地の地磁気観測計データの利用

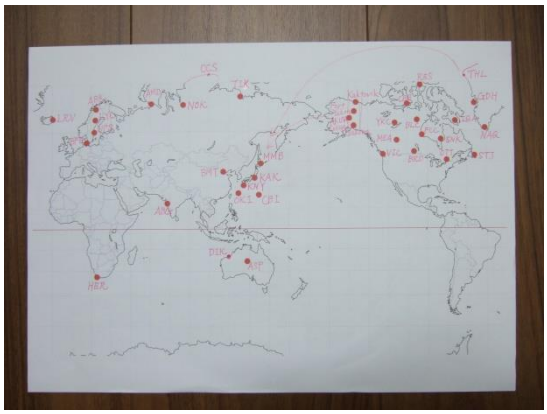


図 2

それなのに、なぜ私が一応、「東京」周辺を震源だと思ったか、つまり、実際に群発地震を引き起こした山梨県東部・富士五湖に近い位置に絞ることができたかについてだが、これは、後述するように、現在全世界に設置してある磁力計のデータをネット上で精査する余裕が、私にあったからである。

自閉症児たちのお母さんからの報告が遅いと、そのような余裕はないのであるが、地震の五日～前々日くらいに報告があると、一日一回くらいは磁力計の測定値を見て回ることができる。

先の自閉症児の「心の叫び」を生かしつつ、もっと地震予測の精度を上げる方法はないかと考え、そこで私は、図 1 の青い矢印が示す直線にさらに交わる別の直線（赤い直線）をおおまかに割り出すことができれば、それらの直線どうしの交点として震源を見定めることができると考えたわけである。むろん、交点は地中（数 km～数十 km）にあることになる。

この作業に最も有効な方法の一つが、地磁気の様子を探ることであると思われる。地震電磁波は、必ず大円（大圏）方向に伝播する。(「大円（大圏)」とは、地球をその中心を通る平面で切ったときの切り口の円)

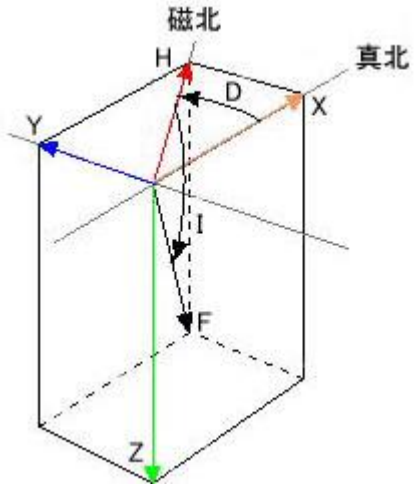


図 3

まず、結論から言うと、図 1 の赤い直線は、アラスカ・カナダ・ロシア・北欧・グリーンランド・日本に設置してある磁力計（図 2）の 1 月 22～24 日時点における、地磁気の各成分（図 3）のデータを分析した結果、それらが捉えた地磁気の大変動が地球上のどこで起きたか、地震電磁波がどの大円平面上の方向から来ているかを示したものである。

●「国土地理院　地磁気測量」のページ（地磁気の解説）
http://www.gsi.go.jp/buturisokuchi/geomag_index.html

■地磁気観測計のデータ解析による震源方向の割り出し

図 2 の各所に設置してある磁力計のデータの多くは、以下のようなサイトで得ることができる。

●気象庁　地磁気観測所
http://www.kakioka-jma.go.jp/cgi-bin/plot/plotSetNN.pl

●International Real-time Magnetic Observatory Network（INTERMAGNET）
http://www.intermagnet.org/apps/plt/dataplot_e.php?plot_type=b_plot

●京都大学大学院理学研究科附属地磁気世界資料解析センター
http://wdc.kugi.kyoto-u.ac.jp/index-j.html

●独立行政法人　情報通信研究機構（NICT）　太陽地球環境情報サービス　リアルタイム地磁気データベース
http://kogma.nict.go.jp/cgi-bin/geomag-interface-j

●Canadian Magnetic Observatory System　（CANMOS、カナダ地磁気観測システム）
http://geomag.nrcan.gc.ca/common_apps/ssp-1-eng.php

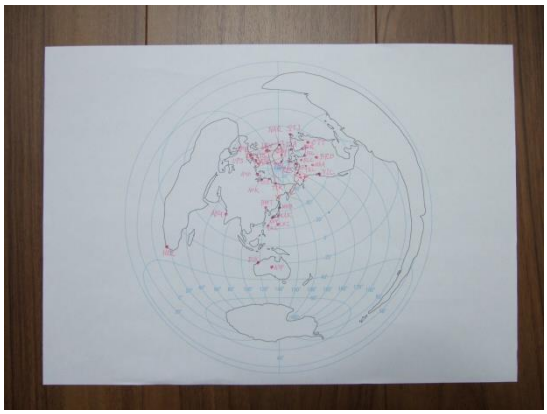


図 4

赤い直線（大円）の描き方だが、これらは必ずしも、ある一つの磁力計を通過しているわけではない。むしろ、赤い直線の多くは、ただ単に、ある二つの磁力計の垂直二等分大円（二つの磁力計から距離が等しい平面と地球の表面とが交わる円弧の一部）や、直線状に並ぶ複数の磁力計に対して直行する方向の大円を描いてみただけである。（図 4 参照）

例えば、京都大学によって提供されている磁力計のデータを見てみる。以下は、1 月 24 日のデータである。（本来は、この乱れた波形が地震波であることを見極める手順が必要だが、ここでは省略。）

http://wdc.kugi.kyoto-u.ac.jp/plot_realtime/quick/201201/index_20120124.html

このうち、よく似た波形を示しているグラフを挙げてみる。例えば、ABK、AMD、BFE 、DIK、GDH などは、大きく乱れ、地震電磁波を捉えた時刻だけでなく、振れ幅（地震電磁波の強度）も似ている。

複数の地点における波形が似ているということは、それらから等しい距離のどこかに震源があるということだと推定できる。例えば、ABK と GDH の組、BFE と LRV と NAQ の組の位置関係を見ると、方位図法上では図 4 のように一列になる。これらの垂直方向の大円は、ほぼ日本列島を通過することが分かる。

（本来は、より厳密に波形を見極めていく必要があるが、1 月 28 日の地震は、その震源が日本列島の大円方向にあることが波形から非常に分かりやすいものであったので、この地

震を例に挙げた。）

■地震電磁波の大円方向への伝播

さて、どの磁力計のデータに基づく大円が日本方向に適用できるかを調べるには、地図の描き方を知っておかないといけない。
「メルカトル図法」とは、図 2 のような図法である。一方、「方位図法」とは、中心からの方位が正しくなるように描く図法で、地震学で多用される心射方位図法や、飛行機の最短経路を見い出すのに使われる正距方位図法などがある。
多くの磁力計を描いた図 4 は、正距方位図法である。なぜならば、心射方位図法では、基本的に地球の半球しか描けず、裏側の半球にある磁力計の位置が描けないためである。地震電磁波の方向を詳しく分析するには、日本から遠い磁力計も見ておいたほうがよい。

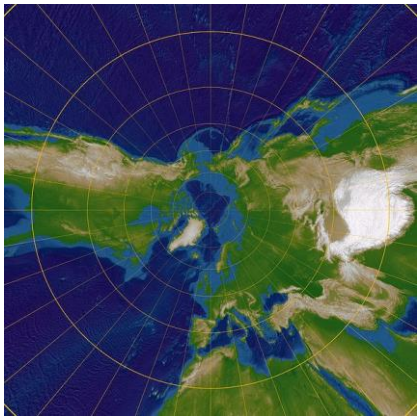


図 5

ただし、どの磁力計がどのような波形を示したかを見たあとは、今度は、日本を中心とする心射方位図法に情報を投影する。心射方位図法はあらゆる大円が直線となるため、大円方向に伝播する地震電磁波を直線で描くことができる。そのうちの日本の部分だけを取り出したのが、図 1 である。（図 5 は、北極を中心とする心射方位図）
正距方位図法のままだと、地図の中心を通過しない大円（図 1 の赤い直線）は、相変わらず（図 2 のアラスカやグリーンランドから日本に伸ばした赤い曲線のように）曲げて描かなければならなくなる。
実際には、図 2 のカナダ北東部やグリーンランドや北欧やアイスランドの磁力計は、カナダのオタワ（OTT）やヴィクトリア（VIC）よりも日本に近い。だから、NAQ・GDH・THL・IQA・ABK・LRV などの磁力計が大幅に乱れると、日本方向が震源である可能性が高くなると考えられる。
全く同じではないが、すでに似たような方法を実践している地震研究家の方々も、多く

いらっしゃるようである。

■自閉症児の「指差し」も大円方向か

そのようにして赤い直線を引いていくと、今回の場合、1 月 22～24 日にかけて、地震電磁波が日本列島を縦横断する方向から世界各地の磁力計に観測されたことが分かる。ただし、これだけだと、「日本を通る方向から来た」ことは分かっても、震源が赤い直線の延長上（台湾や東南アジアやオセアニア）である可能性もあるわけである。

そこで、自閉症児が指差した方向を示す青い直線と、磁力計から分析された地震電磁波の発生源の方向を示す赤い直線とが交わったあたりに、震源があるのではないかというのが、私が考えているところである。今回の場合、その二者の各交点が東京を中心に散在したので、私は東京近辺が震源だろうと予想したわけである。

重要だと思われるのは、この自閉症の男児たちが指差す方向は、おそらく大円方向であるということである。このため、日本を中心とする心射方位図において、青い線も直線で描けたわけである。

また、実際に 3.11 以来ここ一年間、メモしておいた自閉症児たちの「青い直線」と磁力計データの結果としての「赤い直線」の交点付近に中・大規模地震の震源があることから、自閉症児たちが「わー」と感じているものの正体の一つが本当に「地震電磁波」である可能性が高いことになる。

ただし、自閉症児の行動に変化が見られる時期は、世界中の磁力計に変化が観測されるよりも数日以上早い場合が多い。これは、自閉症児に限らず、地震予測の体感を覚える一部の一般の人々でもそうである。この点については、さらなる精査が必要だろう。

■HAARP の存在

図 6

さて、このように私は、世界中に設置してある磁力計のデータを参照してみているわけだが、ここで HAARP なる施設について書いておく。

HAARP とは、東京大学・京都大学も技術協力している、「高周波活性オーロラ調査プログラム」なる米国防総省・米軍の軍事・気象研究計画のことである。アラスカの HAARP 施設からは、大出力の人工電磁波が電離層に向かって照射されており、これが世界各地の磁力計に観測されている。（図 6 はそのアンテナ群）

HAARP については色々な見方があるようだ。世界・日本の一部の有志地震研究家の方々からは、気象操作兵器・地震兵器であると目されている。アマチュア界だけでなく、欧州議会も HAARP に対する懸念を表明するなど、HAARP を気象操作兵器だとする公式の懸念表明がすでに多くある。欧州諸国ではテレビでも普通に登場しているような施設である。むろん、米国防総省の開発だから国防予算が付けられている。

昨年、我が国の国会においても、ある議員がついに地震兵器の存在を匂わせる発言をした。何しろ、HAARP の動きをモニターするための磁力計自体が東京大学製のものであることが公にされている。今現在、HAARP 施設は世界の十数か所にまたがっているようである。

一方で、HAARP はそのような危ういものではない、とする意見もある。私にはよく分からない。私は、そのような議論には関心がないので、ブログでは深く触れないことにする。

ちなみに、人工地震と言うと、オカルトめいた話に聞こえるものだが、れっきとした学術用語で、軍事目的を問わない既存の技術である。高度成長期に、人工地震実験のたびに「大成功、人工地震」といった記事を書いては自国の技術を自画自賛していたのは、我が国の新聞、我が国であることを忘れてはならないと思う。

そんな中、予定以上の規模の人工地震を起こして新幹線のダイヤを乱す失敗をし、それが自国の新聞に乗った国も、我が国である。後者は、私が二歳のときであった。

さて、私は HAARP の存在を、3.11 後に東北の被災地域の共感覚者から教えられて知った。しかも、この HAARP の動きを見ていた被災者の中に、3 月 10 日前後の大地震を予測して対策をとった人がかなりいたことを知って、愕然とした。今の時代に大切なのはこういうことなのだと、改めて思った。「これがどういう施設か」にかかわらず、「自分や家族を守るためなら、使える情報は使えばよい」のだということ。

その後、何人かの共感覚者や自閉症者の訴える地震の前兆体感を確認したところ、HAARP から来た人工電磁波を捉えた各地の磁力計の波形の乱れに対応しているものが一部あった、ということだけは言える。

現在のところ、各地の磁力計は、HAARP から照射される人工電磁波が地球上のどこに落下したかを「受け身的」に観測できるのみであるようだ。私の場合、文系なりの「なけなし」の知識でこれを調べ、自閉症児の自然観察力の豊かさの紹介と証明のために転用する発想を今述べている、というわけである。

■自閉症児の体感と世界中の磁力計の合わせ技で、自然電磁波と HAARP からの人工電磁波を選別することができるか

私の関心は、何度も書くが、「自閉症児たちや動植物たちの自然観察力の素晴らしさ」にある。つまり、我々現代の多くの人間が失ってきたと思われる感性の大切さを知ってもらいたくて、現代の人間が得た言語や技術で語っているにすぎない、ということである。
「HAARP が、気象操作・地震誘導兵器であるかどうかを検証すること」にあまり関心はない。私の HAARP 研究は、あくまで自閉症・発達障害者による自然現象察知・地震予測の研究の副産物である。

ただし、「副産物」と書いたのは、先述のように、HAARP 以外の各地（カナダ・ロシア・北欧・グリーンランド・日本など）に設置してある磁力計には、地球上の地震電磁波や地球周辺の自然電磁波のほか、HAARP から照射された人工電磁波も観測されるからである。

このことには、すでに世界中の学術機関から日本のアマチュア地震研究家まで、多くの人が気づいていたようだ。知らなかったのは、（私を含めた）多くの日本国民のほうであったようだ。

世の中にはこういうものもあると知っておいて損はないと思う。少なくとも、HAARP が意図的に地震を起こす気がなくても、HAARP からの電磁波が気象変動に影響を与えている様子だけは観察されるということである。

もし、現代に生まれた私が見ている、現代に生まれた自閉症児の異様な地震前兆行動の中に、自然電磁波ではなく、何か人工的な電磁波照射によって引き起こされている地球の異常に対する先見的な反応と警告があるなら、私としては、自閉症児に対する心配と敬意の混ざった気持ちになる。

HAARP のような人工電磁波照射装置が造られたのは、ここ最近の出来事だから、今の自閉症児は、昔の自閉症児が見もしなかったような異様な光景を見ている可能性もある。

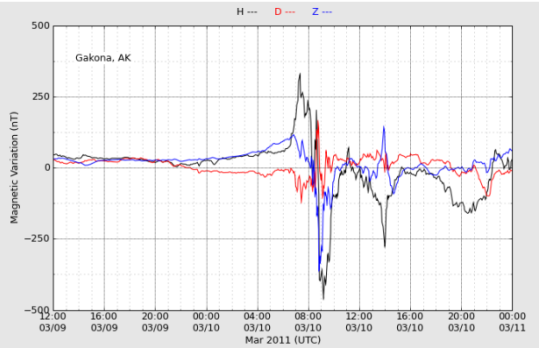


図 7

ただし、今現在、見かけ上は HAARP（人工電磁波照射装置）とは別に HAARP 観測を

しているアラスカ大学は、一か所（ガコナ・Gakona）の磁力計の波形しか公表していない。図 7 は、3.11 の巨大地震の前兆を捉えたと思われる波形である。

「HAARP のデータ群」
http://www.haarp.alaska.edu/haarp/data.html

以前は四・五か所の波形を公表していたが、3.11 直後から急に公表しなくなった。一か所（一点）の情報しかないということは、地震電磁波の規模（地震の大きさ）の推定はできても、震源（アラスカの HAARP から見た方向）の推定は難しいことになる。これは、片方の耳が聞こえなくなった人にとって、音量は分かるが音源の方向が分かりにくいのと同じである。

図 4 の三つの赤く細長い四角のうち、アラスカに描いたものが、HAARP を直接観測している磁力計である。このうち、最も南側にあるのがガコナ（Gakona）である。

もしこれら全ての磁力計のデータを見ることができれば、それらの波形の振れ幅を比較でき、四つが似たデータならば日本方向に震源があり、異なるデータならば日本方向に震源はないことを推定できる。この方法についても、すでに何人もの日本・世界のアマチュア地震研究家が指摘しているようである。

■まとめ

以上、長々と書いてしまったが、高度科学技術文明に生きる我々が過去のどこかに落としてきたような動物的能力・自然現象察知能力を今でも持っていると思わせてくれる自閉症児たちの能力を、その高度科学技術・軍事技術を逆手にとって平和利用しつつ、少しずつ勉強していきたいというのが、私の目的だということである。

■画像出典
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%83%E5%B0%84%E6%96%B9%E4%BD%8D%E5%9B%B3%E6%B3%95
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E5%91%A8%E6%B3%A2%E6%B4%BB%E6%80%A7%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%83%AD%E3%83%A9%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0

第十一部　私の個人的な発想メモ「電磁気哲学や量子自閉症学の提案」「心と体の話」

など

2012 年 2 月 10 日　起筆、擱筆、公開

たぶん、難しめの記事です。どちらかと言うと理系向け。

■2014 年 8 月 16 日追記
以下の新しいブログ記事も合わせてご覧下さい。

疑似科学にまつわる懸念　― 疑似科学ではない超音波知覚と疑似科学である動物駆除超音波装置を例に ―
https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/102454374.html

■心と体の密接な関係

前回の記事では、「地震の数日前から行動が変化する自閉症児の体には、本当に地磁気の歪みが見えているのではないか」という主旨のことを書いたが、地震の話題に限らず、一般に「人体と磁気の関係」は「人体と電気の関係」よりも「実感として分かりにくい」から、ましてや言語障害のある自閉症児と磁気の関係などは、今後も話題にはのぼりにくいと思う。
「人体と電気の関係」ならば、特殊な知覚能力を持つ自閉症者や共感覚者に限らずとも、ドアノブを触ったときに静電気が放電されてバチッと来るなどの嫌な体験のように、普通の五感で体験できる。
いや、実は、自閉症者や鬱病者や強迫性障害者では、静電気や街中の人工的な音に対する不安感が増すとか、本当に静電気に反応しやすい体になっているといった報告は、海外でもあるようだが、日本でそれを言うと、今でもオカルト科学扱いされる可能性があるから、これ以上は言わないでおこうと思う。
今のところは、自閉症・共感覚などに関心があり、自身も共感覚を持って生きる岩崎という一人の人間が持っている、自閉症児たちへの敬意や親しみなどの個人的な思いを、いかめしく学問的に語っているのがこのブログ記事だろう、という程度に読まれるだけでも十分ありがたいと思う。

■磁気感知についての二つの仮説

さて、「自閉症児には磁気の歪みが感じられる」ことが本当ならば、二つのことが考えられる。

一つは、自閉症児も同じ人間である以上、生物・有機体としての分子・原子組成は一般健常者とほとんど同じなのだが（従って、本当は人間は皆、潜在意識で磁気を感覚していて、地球・家電製品・金属製品などのN極やS極に引っ張られているが)、一般健常者だけが磁気感知能力（というより、ここでは自我による磁気認識）を失い、自閉症児ほどその能力が残っている可能性。

もう一つは、自閉症・発達障害と呼ばれる一連の症状を生み出すような特定の分子・原子組成やDNA構成、電磁気的な状態の揃い方や乱れ方というものがあって、それが彼らの磁気感知（磁気認識）を実現しているという可能性。つまり、自閉症児や我々のような共感覚者というのは、体の作りが現代の一般多数者とは本当に異なる可能性。

両仮説のうち、前者のほうは、「人体が磁気に反応すること」と「自我が磁気に反応すること」とを別概念としているが、いずれにせよ、電磁気学的には、「人体が磁気に強く反応する」ためには、「人体に磁場をかけたときに、その人体のうちに多かれ少なかれ磁気モーメントを一定方向にそろえるような機構」が存在していなければおかしいことになる。

つまり、こういった反応を、自閉症児たちの体は地震予測などにおいて本当にやっているのかどうか、という話になる。とりあえず、自閉症による地震などの自然現象感知だけを例にとるとしても、元々自閉症児が、鉄やコバルトのような強磁性体質を持っていることはあり得ない。

かと言って、自閉症児の体温は、一般健常者と同じく摂氏36～37度が多いため、自閉症児の体内の特定の器官の構成粒子がネール温度を超えて、磁場をかければ自由に磁化するような体質になっているわけでもない。

むろん、鳥類には、実際に体の磁気モーメントが変えられることによって地磁気の乱れを感覚したり、元いた場所に戻ってくることができたりする種が存在するが、自閉症児についてのそのような報告は今のところ聞いたことがない。

■自我・人体と磁気の関係

電子はマイナスの電荷を帯びているが、電子の軌道運動による磁気モーメント、及び電子自身のスピン磁気モーメント、これらがいわゆる「磁気」の根本にある。我々の自我・自意識というのも、本当はこれらに基づく脳神経系の電磁気的発作を起源としている。

「電場」や「磁場」の「場」というものは、文学表現が嫌いな物理学者には怒られるかもしれないが、本当は、日本語で「間（あひだ・あはひ・ま)」と表わされるような、「空気感」の展開する「場」の意味でも追究可能なものである。電気と磁気は、相互不可分の関係であって、お互いがお互いを生み出すものである。

ただし、我々の自我を生み出す脳神経系のはたらきは、電気的な視点からは大いに語られるが、磁気的な視点からはあまり語られない。だから、「我々の体は電気に反応する」と言うと、すぐに静電気などを思い浮かべるのに、「我々の体は磁気に反応する」と言うと、途端にオカルト科学じみた不審な発言だという錯覚が起きるようである。

しかし、もし自閉症児たちの素晴らしい自然観察能力が、一種の電磁誘導のようなものだとしたら、あるいは、反強磁性やほとんど磁化を持たない一種のフェリ磁性における超交換相互作用の崩れへの「気づき」のようなものだとしたら、我々人類が、近現代化の過程で失ってきた我々自身の身体の磁化能力を利用した自然観察力がどのようなものであったかが、本当に分かるのではなかろうか。

時々、テレビの超能力番組などで、色々な金属を体にくっつける磁石人間などが登場するが、あれが本当かどうかは知らないものの、普通は人体というのは、そんな強磁性体ではあり得ない。

一方で、私が持っている共感覚を調べるのにもよく使われる MRI という装置は、核磁気共鳴（NMR）を用いた生体内部の画像化の方法である。MRI から出てきたときに、頭がふらついたという精神疾患者や共感覚者を、何人か知っている。（これらの私の知人は、医者から不審に思われたり、逆に医者に迷惑がかかったりすることを心配して、ほとんど誰もそのことを報告していないようである。）

昨今は、いわゆるリニア新幹線（正式には中央新幹線）が話題だが、これは超電導磁気浮上式リニアモーターを用いたものである。私としては、東京から大阪までどんなルートで走ることになるか、などという政治的な駆け引きよりも、むしろ自閉症児・解離性障害者・我々のような共感覚者がリニア新幹線の車両内などの強磁場空間に入った際に、身体や知覚様態にどんなことが起きるのか、そういったことのほうに関心が深いのである。

■心の悲しみは体の悲しみ

少し横道にそれる。「心が痛いのは体が痛いから」だとか、「体が痛いのは心が痛いから」だと言うと、一笑に付されるのではないかと不安なのだが、私は、知人・友人である自閉症児の素晴らしい自然観察力、鬱病者や解離性障害者などの綺麗な心を見ていると、どうしてもそのような考えや人間観に至る。

もっと言うと、「ある人の心が優しいのは、その人の心臓や肺や腸が優しいから」だと思うし、「人の悲しみを一緒になって泣ける美しい人は、きっと血や骨や細胞が美しい」のだろうとも思うのである。

この「綺麗」とか「優しい」とか「美しい」とかいうのは、何も「タバコを吸ってないから肺が綺麗だ」とか、「髪をきちんと洗っている」とか、「トマトをよく食べるので血がサラサラだ」とか、「美人だ」などという意味で言っているのではない。そうかと言って、

心臓や腸や骨を擬人化して言っているのとも違っている。ともかく、いわゆる哲学用語の「純粋直観」のような直観で、このようなことを思うわけである。

■アニミズム的・汎神論的な電磁気学・量子論の提案

この私の考え方は、言葉を変えると、「究極のアニミズム」とか、「究極の汎神論」とも言えるかもしれない。だから、私にとっては例えば、量子論を理解するのに、普段親しんでいる和歌文学の心を取り入れてみたらうまく理解できた、というようなことが成立している。私の高じた物理学趣味は、文系人間の果てにあるものとしての物理学であると言えそうだ。

例えば、「心が優しい人であるのは、その人の体の分子・原子の動きが優しいから」だと思うし、「人の悲しみを一緒になって泣いてあげている人の体の中では、きっと分子・原子も一緒になって震えて、涙を流している」のだろうとも思うのである。

ここまで来ると、いよいよ本当におかしな人だと思われそうだが、私の言っていることは、私の知る自閉症児たちにとっては、案外、人気と言うのか、安心の薬になっているようなので、むしろ、書くことをやめるわけにいかないというような類のものだと身勝手ながら思っている。

私の場合、「自閉症児の心がなぜか分かる（見える）」とか「原子核や電子の震えを共感覚で実感する」といった私自身の「純粋直観」が先にあって、その後でマクスウェル方程式やシュレーディンガー方程式などを理解したという経緯がある。

例えば、電子が磁気を帯びる要因には、軌道運動による磁気モーメント、及び電子自身のスピン磁気モーメントがあるが、これらの揃い方や乱れ方の一つ一つの積み重ねが、我々の「自我」であって、自閉症や鬱病というものは、本当は人体の変化が追いつかないほど急速に発展する現代社会に対する「正当な」電磁的・量子的状態であるという方向から、私は電磁気学や量子論を理解した。

こういう感性、こういう物事のとらえ方は、元を辿れば、私が小学生だった頃からあった気がするし、僭越ながら、こういう感性があるからこそ、私は自閉症児・発達障害児の心に非常に親しみを感じたり、彼らとすぐに仲良くなれるのではないかと思っている。

しばしば、電車の中などで、「将来的に、電磁気哲学や量子自閉症学といった分野を作れないだろうか」と、ふと考えている自分がいる。ただ、自閉症・発達障害・共感覚などの分野における私の主な夢は、基本的に「語り合う」ことであって、しかも、文系学問を中心に語り合うことであり、難解な理系学問の土俵に持って上がることではないから、基本的には「高じてしまった趣味」として、物理学をやっているという状況ではある。これからもそうだと思う。

■自閉症児の感性の証明

それにしても、大震災後になって焦ったかのように「絆、絆」と言い始めた我々をよそに、元より大自然との「絆」を黙って持っていた自閉症児たちから、自分は学ぶところがまだあると考えている。けれども、学問的（特に自然科学的）態度としては、残念ながらそれだけではまずいことになるとも感じている。
「自閉症児は本当は素晴らしい感性の持ち主である」と、たとえ自分では思っていても、それはこのサイトに来てくれる自閉症児たちや特殊な心身の感性の持ち主と私との間の関係であって、このような文学表現を伴う自閉症観をあまり良くは思わなかった学者とも将来的に対等に渡り合っていくには、どうしても、私が学者に自分の共感覚を説明するときに通過してきた色々な苦労や思い出と同じことを経験する必要があるとも思っている。つまり、「自閉症児の自然観察力は素晴らしい」という曖昧な文学表現を論理的に説明するだけの神経学的・理論物理学的知性をこちらも持たなければならないと思っている。
これは、私が実際に叶えたい夢でもあるし、既存の学者に対する礼儀でもあるかもしれない。
一概には言えないが、かなり大まかに言えば、天体や地球の動きなどの巨視的・大局的な視点においては、世界を記述するものは物理学であって、これはアインシュタインの相対性理論に代表される。そして、地球上に住む生物・有機物・我々の人体などの記述は、まずは化学的な文脈によって行われるものである。
ところが、さらに微視的な視点が精神医学や認知心理学などの分野にも適用されるようになって、私としては、人間は自分の体が電磁気的・量子論的に、つまりは物理学的にいかなる状態のときに暗い気持ちになるのか、嬉しい気持ちになるのか、人を愛するのか、人を嫌いになるのか、とも考えるようになった。

■人間の原初の姿としての自閉症

私は、これまでにも何度も書いてきたが、「我々人類は、文法言語や近代的自我を持たなかった時代には、皆がそれなりに自閉症的であった。このことは、電磁気的・量子論的にそうであった」という考えを持っている。
いわば、電磁相互作用が束縛している原子の「乱れ方」に対する認識能力のうちの一番強いものを、我々は逆に「障害」と見なして「自閉症」と呼んでいるにすぎないのではないか、ということである。
そして、その自閉症のさらに昔の彼方に、我々人類と動物との接点があると考えている。むろん、これは証明済みでも何でもなく、私の「純粋直観」のようなものにすぎないが。

しかし、我々人間の自我というものを、電磁気学的・量子論的な一瞬の乱れ、いわば超交換相互作用の一瞬の破綻などを始原として記述できるような、ある種の部分関数のことである、としてみた上で、私はこれからも自分の発想を楽しんでみたいと考えている。
「自閉症や発達障害は、動物としての人間の原初の姿である」という私のような人間観・世界観を持っている人、そして、その考え方を公表している人が、日本にどれだけいらっしゃるかは詳しく知らないが、少なくとも私はこの考え方や思いで歩んでいければと思っている。

■補足

ところで・・・、前々回の記事で、地震予測をブログに載せてみようと書いたが、載せるのではなく、将来のためにデータとして溜めていこうと思う。ただし、震度 6 弱以上の大地震が予測された場合は、なるべくその旨をブログに載せようと思う。

第三編　三十歳～三十九歳

第一部　「音域表と聴覚・共感覚」（様々な日常音・動物の声の音域や、私の聴覚・共感覚による可聴域）

2012 年 10 月 4 日　起筆
2012 年 10 月 30 日　公開
2015 年 5 月 18 日　最終更新
特設サイト「超音波知覚者コミュニティ東京」
消費者庁、公正取引委員会、東京都、産業技術総合研究所（AIST）、超音波装置製造業者に提供

別添資料を見よ。

第二部　岩崎式日本語（ISReJP）論理値表

2013 年 7 月 21 日　起筆、擱筆、公開

メインブログに岩崎式日本語（ISReJP）論理値表について書きましたが、第三ブログに

『岩崎純一全集』第五十一巻「科学技術、産業（一の一）」

も関連するので、リンクを貼っておきます。

https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/57876508.html
（2018 年 7 月 12 日に追記：現在は『全集』に収録。）

第三部　「音域表と聴覚・共感覚」、超音波知覚者コミュニティ

2013 年 8 月 11 日　起筆、擱筆、公開

メインブログに「音域表と聴覚・共感覚」などについて書きましたが、第三ブログにも関連するので、リンクを貼っておきます。

https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/59671802.html
（2018 年 7 月 12 日に追記：現在は『全集』に収録。）

第四部　岩崎式言語アルゴリズム構想（2013/10/20）

2013 年 10 月 21 日　起筆、擱筆、公開

岩崎式言語体系のページに岩崎式言語アルゴリズム構想（2013/10/20）を掲載しました。
これは、私が開発を構想している、いわば「精神疾患の誤診の自動検出・補助ソフト」ないし「自己様態の人間学的・言語学的記述ソフト」の元となるものです。まだまだ不十分です。
制作には iEdit を用いました。

http://kondoumh.com/software/iedit.html

Frieve Editor でもよいのですが、本来 Windows 7 以降には未対応なので、無理にインストールしても、管理者権限でないと動かない、時々落ちる、などの不都合があるのです。

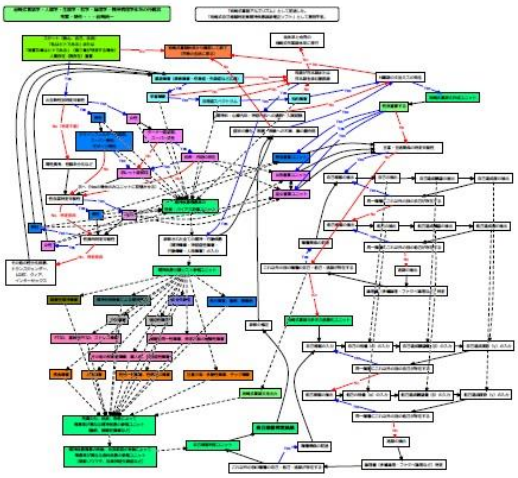
http://www.frieve.com/feditor/

アルゴリズムのほうは、断片的には深い発想は出来ているのですが、まだどうすべきか迷っているところが多々あるので、厳密には今後完成までに 20 年や 30 年はかかるといっ

たところだと思います。

問題は、十数年ごとに精神疾患の分類（DSM や ICD など）が更新されるので、それを多少なりともアルゴリズムに反映させていかなければならないという点です。

何しろ私の目的は、アルゴリズムやプログラミング言語に詳しくなることではなく、人間そのものへの自分の関心と発想の記述であり、人間学・哲学・精神病理学・生態学などを網羅するような何らかの体系を創ることですから、本当はそういう時流に振り回されてはいけない気もしますが、やはり気にはなってしまいます。



第五部　御嶽山の噴火、登山、日本の山などについての雑感

2014 年 10 月 3 日　起筆、擱筆、公開

御嶽山の噴火では、死者数について、日本のマスメディアは死亡と心肺停止とをはっき

りと分けて報道している一方で、海外では全てをまとめて最初から「40 人死亡」などと報道したところもあるようで、それは単に医学的な立場や国民性の違いかもしれないし、感想としては少々大げさかもしれないが、人の死（死生観）や自然観そのものについても色々と考えてしまう事故となったと感じている。

私自身は、アルピニズムやスポーツやレジャーとしての登山をしたことはなく、山岳信仰や地理的・生態学的・文化的観点からの山岳・森林・植生などに関心があるタイプだし、旅行先でロープウェイで山に登ったり、徒歩で標高 200m くらいの山に登ったりする程度で、登山そのものには全く詳しくないが、いわゆる登山愛好家・山岳愛好家・山岳写真家などと接する機会は多いほうだと思う。個人的にではなく、山岳関連学会などの組織相手の仕事の中で、ということにすぎないが。

今回も国民の命がかかっていることだから、気象庁や自治体も「登山者への情報提供が不十分だった」と謝罪するのも無理はないと思うが、逆に登山者が登山計画を家族に伝えたり警察に提出していなかったり、日帰り・単発の無計画登山だったりしたがために、遺体の身元確認や行方不明者の発見が遅れている現状については、色々と違うことを思ってしまう。特に、「息子が山にいるとは知らなかった」親のために、警察・消防隊・自衛隊が火山灰まみれになっている光景は、それが仕事だとは言え、何とも言えないなと思ってしまう。

元々毎年の登山計画書の提出率が 3 割程度で、噴火などに巻き込まれた事故者に限れば 2 割を切ることから、登山者の責任でできることがあるということも、同時に物語る事故だった。

今まで、槍ヶ岳周辺の方々と一緒に仕事をさせていただいたり、一昨年にお亡くなりになった日本山岳会の宮下啓三氏の話を直接伺ったり、同山岳会の会長も務めた今西錦司の自然観・生命観に私淑したりしているうちに、日本の登山が、ウェストンなどの宣教師によるキリスト教の布教活動、そして「狩り（なりわい・生業）」と「信仰（アニミズム）」の二点を「登山行動」から切り離す精神と一体化して「山登り」から「近代アルピニズム」として発展するまでに、様々な紆余曲折があったことは、理解できるようになったつもりである。

今西錦司の生態学については、今でも私の中では特別で、私の自然観の一つの基礎を作っていると言ってよい。一方で、例えば、槍ヶ岳山荘の経営者の話などを伺っている中で、槍ヶ岳の大自然に感じ入るために登るのでありながら、その槍ヶ岳を切り崩して山荘を建て増ししたりといったことについては、色々と複雑な感想を持った。

しかしそれよりも、山岳会・山岳関連学会の方々によると、世界遺産の富士山のほうが大変らしく、日本人かそれ以外のアジア人かに関わらず、路を外れて用を足したりゴミを放り捨てたりする登山者が激増していて、別の意味でどうしようもないようだ。そうなると、なおさら「山は登るよりも遠くから見る方がいい」という私のような好みを持つ人の意見に分がありそうな気がするのだが・・・。

少し前までは、もし自分が冬山や火山に徒歩で登るなら、火山の噴火などの自然災害に巻き込まれるか否かは「運」と「自己責任」によるものだと覚悟して、ドまじめに登山計画書も提出した上で、ただし再び家に帰ることができるとも思わずに、半ば厭世的に一歩一歩を登るのではないかという気がしていた。

厳密には、今もその思いは変わらないのだが、しかし「登山計画書」の提出そのものが、「人間が山を登攀・制覇する」という近代アルピニズムの精神の象徴であり、「その登山者が心から登山をしているか否か」を判断する上で重要なことは、（ほとんどの山で提出が義務ではなく任意の権利である）登山計画書を提出したか否かなどという「近代の法精神・任意の権利の行使の有無」という点ではなく、「何事もなく安全に下山し帰宅できるだろうなどという根拠なき蓋然性（見通しの甘さ）の有無」だという点に気づいた。二度と帰ることができないときはできない、死ぬときは死ぬのであり、やはり最終的には「山への畏敬の念」という話につながってくると思う。

もしかしたら今回も、元々誰に助けられるつもりもなく、わざと計画を第三者に知らせずに、ただ「そこに山があるから」登り、噴火で吹き飛ばされ、山に生きて山に死に、それが本望だった人もいるかもしれず、もしそうなら、その「無計画の自然愛」にはむしろ敬意を覚えるべきところがあるとも感じる。

そうは言っても、山岳会・山岳関連学会の方々の話を伺えば伺うほど、自分は登山には向いていない人間だな、ということが分かるばかりで、不思議な気分だなといつも思っている。

さて、話題は変わるが、日本列島の山の特徴として一番目立つのは、やはり標高第 1 位（富士山、3,776m）と第 2 位（北岳、3,193m）の標高差が、第 2 位と第 100 位（新蛇抜山、2,667m）の標高差よりも大きいことかもしれない。

しかも、第 2 位から第 100 位（本当は第 300 位くらい）までは、ほんの数センチメートルから数メートルずつ漸減していて、そのほとんどが飛騨または赤石の二つの山脈に属しているから、最高峰兼独立峰としての富士山の「孤高さ」・「異様さ」は群を抜いている。日本の山の中では、かなり特殊な山だと言える。

富士山は天皇と同じく日本の象徴だという形容も、山岳関連学会の保守系論者の口々から頻繁に聞こえてくるが、その天皇にとっては、遠江（とおとうみ←とほたふみ＝遠い海）国のさらに遠方にある富士山よりも、近江（おうみ←あはうみ＝淡海・琵琶湖）国の琵琶湖のほうが身近な存在で、富士山のことは噂に聞き、和歌に詠むばかりで、日本史上初めて富士山を「旅路にてまじまじと目視した」天皇は明治天皇だったわけである。

富士山の登山の歴史の発展は、江戸時代の庶民によるところが大きい。富士山の権威の発展は、それを一度も見たことがない歴代天皇によるところが大きい。世界遺産としての富士山の威厳は、天皇の権威から庶民の汗水までの合わせ技なのだと思う。

とにもかくにも、「山は神々が創った」とか「山そのものが神である」と言うし、私は後者の言い回しや自然観をとる人間ではあるが、そう言うのであれば、日本の山々の諸要素

と諸関係（標高・地理的配置など）は数学の神かピタゴラスが計算して創ったのではないかと思うほど、都合のよいあり方をしている。しかし、それもただの妄想に違いなく、独立峰火山の標高第１位・２位である富士山と御嶽山も、飛騨・赤石山脈の山々も、木曽山脈の中規模の山々も、どれも同様に「自然に形成された」のであり、それら自体が神々であると私は思っている。

【画像出典】
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%A1%E5%B6%BD%E5%B1%B1_%28%E9%95%B7%E9%87%8E%E7%9C%8C%29

第六部　東京大学総合的認知研究グループでの共感覚実験の回答及びインタビュー

2013 年 7 月 30 日　初回実験実施
以後、継続的に実験に参加
結果の全部または一部が回答者に示されない複数回の実験
著作者岩崎は自らの回答のみを書面または電磁的記録で別途保存
結果ファイル等は実験実施者、回答内容は岩崎が権利を保持
著作者が大学及び実験実施者に権利の一部を譲渡
著作者及び著作権者への問い合わせが必要

第七部　数学者（宇宙際幾何学者）・望月新一氏をめぐる動向　― 数学と日本 ―

2019 年 4 月 20 日　起筆、擱筆、公開

最近、いわゆる ABC 予想を解決したとする数学者、望月新一氏のブログ「新一の『心の一票』」（https://plaza.rakuten.co.jp/shinichi0329/）を拝読している。このブログ自体は数学用語がほとんど登場しないのであるが、現代日本社会の問題を、数理哲学（「数学の哲学」）的な観点から大局的に、時折ユーモアを入れつつ、眺めた内容となっている。

私は氏の論文について、世界中の数学者たちが寄ってたかって査読し、議論しているその動向をずっと追っているが、結局のところ、氏の証明が正しいかどうかは判然としていないとされる。しかし、私が思うに、望月氏の「理解されなさ」は、氏の論文に不備があるか否かが世界中の天才数学者たちにさえ分からないことに起因するものではなく、氏が（我々と同じく）日本人であることのほうに起因している。但し、これも誤解を招く言い

方で、正確に私の意見を言明するならば、「望月氏は（大多数の凡人たる日本国民とは違い）、確固たる日本的宇宙論を持ち、それを数学に持ち込むことに成功した（それによってIUTeich・宇宙際タイヒミューラー理論を構築した）ために、たとえ欧米の数学者が氏の論文を全て正確に、数学的に理解できていたとしても、その精神を理解する（愛する）ことはできず、従って、望月氏の持つ“数学の日本精神”を認めることはできないと欧米の数学者たちが考えている」ことに起因しているというものである。

望月氏は、IUTeichの「心」という言い方をよくされる。いかなる個々人の「心」にも左右されない絶対普遍の境の名称であるはずの「数学」に、なぜ「心」という概念を用いているのか、その理由が氏のブログを拝読していて改めて見えてきたので、非常に嬉しく思っている。

同じく数学者の岡潔も、数学に「情緒」や「仏教精神」を持ち込んで奇人と言われたが、望月新一氏も、おそらくは欧米の数学者から見れば奇人であるのだろう。望月氏の「日本的宇宙論」を彼らが真に理解するためには、望月氏と同じく、桜を眺めながら散歩してみなければならないだろう。